

■今月の特選句

2024年4月



春めきて空裏返すファルセット

工藤泰子

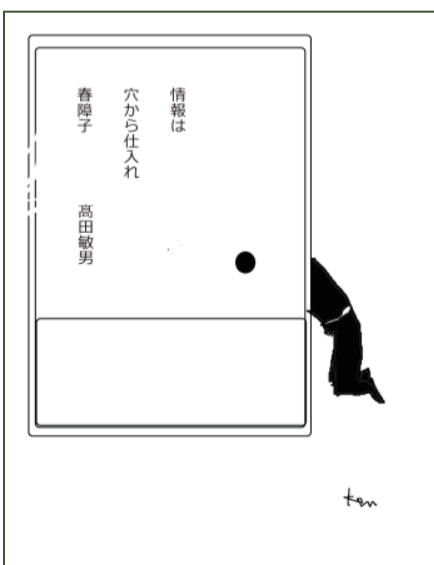
ファルセットは声楽用語で裏声のこと。明るく突き抜ける高い音階だ。声を裏返すことではなく、空を裏返すことを詠んで詩になった。



裏金がドカンと表へ闇の春

和田のり子

裏と表を巧みに使いこなし、時事句としても意味深い。しかも春の明るさを全否定して「闇の春」としたところに言語感覚の冴がある。



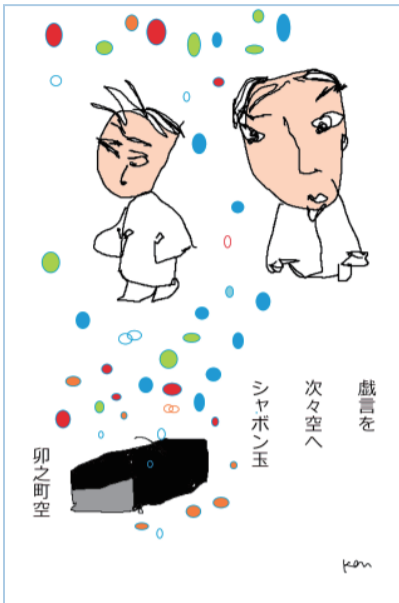
情報は穴から仕入れ春障子

高田敏男

春になれば世間の動きも活発になる。しかし、重要な情報ほど隠されているもの。こっそり傍受するのに障子の穴は最良の方法である。

■今月の特選句

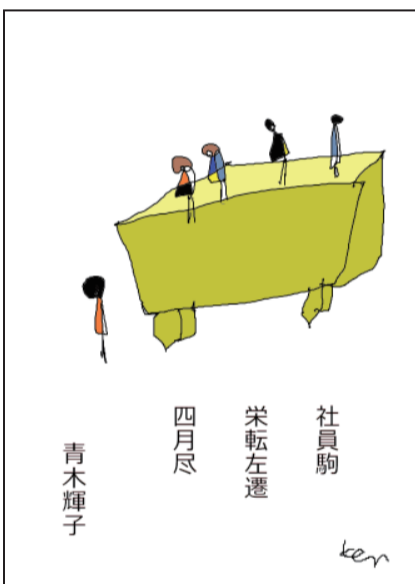
2024年4月



戯言を次々空へシャボン玉

卵之町空

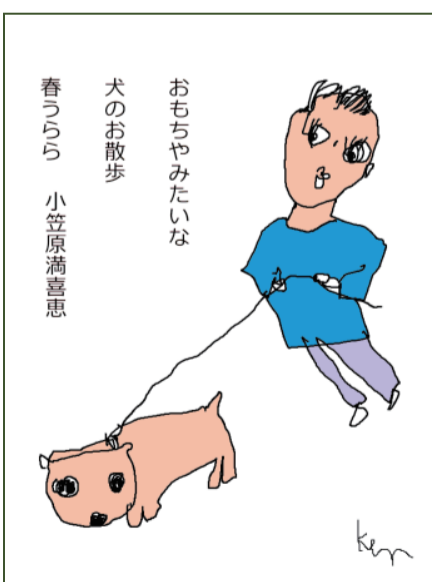
シャボン玉は弾けるもので、実体はほんのつかの間。たわいない会話もその場限りで紙に書いておくほどではない。身軽、気軽の楽しさよ。



社員駒栄転左遷四月尽

青木輝子

四月は、人事異動の時期。人も流れ涙も流れる。栄転左遷の悲喜劇も社員は企業の駒として逆らうことのできぬ習い。駒の哀しさに共感。



おもちゃみたいな犬のお散歩春うらら

小笠原満喜恵

トイプードルのことだろうか。寒い時期の散歩は風邪をひかぬようにと洋服を着せてもらう。春になれば重いコートを脱げて嬉しいね。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

一〇〇%充電完了春立つや ・・・気力体力横綱並みよ	沖枇杷夫
おやつ前おやつの後も春眠し ・・・おやつ食べ食べうとうとしたね	八塚一青
指までもしやぶって旨し桜餅 ・・・アイスクリームのふたも舐めたい	久我正明
空っぽの風や目刺の穴をふく ・・・虚しさかかえる人の闇にも	井口夏子
初音なり不器用なれどほんものの ・・・天然ものは一味違ふ	岡本やすし
人間の諍ひ溶かせ福寿草 ・・・花にも耳があれば気の毒	高須賀溪山
荷風忌の踊り子ガムをくちやくちやと ・・・世を拗ねながら世に媚びもして	荒井 類
リトルリーグの声がうるさい花曇 ・・・大志を抱き大谷めざす	黒田恵美子
よろず屋の今は自販機春寒し ・・・無人やセルフもてはやされて	長井多可志
草萌ゆる地球むずむずしてゐたり ・・・俳句つくれと草も地球も	西野周次
引き潮の曳き残してか桜貝 ・・・強き決意で浜に残るや	南とんぼ
手か箸か鶯餅を摘まむもの ・・・トングを使ふといふ手もあるね	伊藤浩睦
春が来る窓の木蓮ふくらませ ・・・自慢の花に鼻もふくらむ	梅野光子

■今月の滑稽句

* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

久しき雨や小正月を降りしきる	相原共良
光る君の恋の手解き風光る	相原共良
懐手野良の仔犬をしたがへて	相原共良
平和国桜開花にハッチャケる	青木輝子
四月馬鹿親と先生あみだくじ	青木輝子
冬眠もせずごそごそと五七五	赤瀬川至安
険悪な空乱暴な春の雨	赤瀬川至安
コロ犬やふぐりをよけて糞りにけり	赤瀬川至安
荷風忌や寡婦は地藏に合掌し	荒井 類
ガザの病院吾の入院春の宵	荒井 類
朧の夜忘れぬうちに書き記す	井口夏子
ブルーシートをゆさぶっている春嵐	井口夏子
節分会鬼もいなければ福も来ず	池田亮二
五百羅漢中にひょっこり円空が	池田亮二
旧正月と理由をつけて酒を酌む	伊藤浩睦
ファーストサマーウイカは季語なるや	伊藤浩睦
春の川四角い水も丸くなり	稲葉純子
卒業式や学舎に見送られ	稲葉純子
タンポポの絮片道切符の空の旅	稲葉純子
咳すれば隣席の人立ち上がり	井野ひろみ
メールでの合格通知に合掌す	井野ひろみ
神様はカルテ見直し春の雪	井野ひろみ
つかの間のメルヘン庭に霰降り	上山美穂
溝が小川に春の魔法をかけられて	上山美穂
ティーカップの大波小波目借時	上山美穂
愛猫のある処みな暖かし	卯之町空
菜の花踊るガーリックパスタかな	卯之町空
ホーホケキョウホーホケキョウと墓磨く	梅野光子
梅の香の家路を急ぐ夕間暮れ	梅野光子

ひとり身の食卓木の芽蛸と話し
 カウベルを鳴らし佐保姫近づき来
 千曲川落花は花嫁衣裳着て
 孫の手がじじの手つなぐ春の風
 亡き母の唄ひし朧月夜かな
 赤青黄色齒ブラシ並び春の朝
 体中に湿布ビリビリ冴返る
 梅まつりぐると回る猿の芸
 梅園や水車は太古の音をたて
 春が来る寒さ忘れたかのやうに
 笹鳴や鈴鳴り終へし境内に
 東風の宮柏手打てば追風に
 イエローもレッドもかくご春疾風
 春うらら歌うは「どうにもとまらない」
 にわかファン巨人軍の春キャンプ
 蜆汁五臓六腑にしみわたる
 そよ風のリズムに浮かれ金鳳花
 ひれ伏して時間献上春眠に
 立春や一番搾り冷で呑み
 桑の木よ芽を吹かずして身軽さよ
 恥ぢらひてよそよそしきは黄水仙
 風車回るは車か風の子か
 水虫や家族を巻き込む感染力
 初夢をいくつも見たり呑み過ぎて
 初夢を早く見るんだ朝酒で
 早春の脳が欲しがるかまどパイ
 春彼岸シーソーにある軽い方
 露の臺へ接写レンズの迫り来る
 山笑ふけふはここから煙出て
 恋猫聞こえぬ町独り居の春炬燵
 目覚めれば春の雨今日も休もう
 通学帽たんぽぽテンポ・ディ・マルチア

遠藤真太郎
 遠藤真太郎
 遠藤真太郎
 太田和子
 太田和子
 太田和子
 大林和代
 大林和代
 大林和代
 小笠原満喜恵
 小笠原満喜恵
 岡本やすし
 岡本やすし
 沖枇杷夫
 沖枇杷夫
 加藤潤子
 加藤潤子
 加藤潤子
 門屋 定
 門屋 定
 門屋 定
 北熊紀生
 北熊紀生
 木村 浩
 木村 浩
 久我正明
 久我正明
 工藤泰子
 工藤泰子
 くるまや松五郎
 くるまや松五郎
 くるまや松五郎

紅梅の香りの中の大あくび	黒田恵美子
鍋にふた芹の香りを閉ぢ込める	黒田恵美子
ブランコの足のおしゃべりブラブラ	桑田愛子
土筆を入れるポケットは無しスカートに	桑田愛子
草萌ゆる街にはビルが背伸びして	桑田愛子
恋猫や猫撫で声とわめき声	佐野萬里子
鶯の叫声椿の花落とす	佐野萬里子
閏年の二月の空の春めけり	佐野萬里子
駄駄つ子も居住まひ正しお年玉	壽命秀次
霜柱妻に駄駄捏ね踏んでみぬ	壽命秀次
フキノトウ目立ちて摘まれ冷蔵庫	壽命秀次
招かざる客招き入れ春炬燵	白井道義
百歳に王手の白寿雛飾り	白井道義
吉報の背中を押して春一番	白井道義
雨静か絵踏の歴史語る街	鈴鹿洋子
朧月今夜もひとり針を持つ	鈴鹿洋子
鞆にサラリーマンの夜の声	鈴鹿洋子
昭和の歯削られている冬の日	鈴木和枝
おひさまを抱えてた聖護院大根	鈴木和枝
CだのBだの格付けられ何本もない歯	鈴木和枝
春寒し向かう三軒そつぽ向く	高須賀溪山
目刺焼く八十路の坂を越えてなお	高須賀溪山
初雷や車中の電話切らせたる	高田敏男
飯事に手抜き料理の雛あられ	高田敏男
看板は立ち入り禁止や春立ちぬ	田中 勇
塀の上見れば目が合い恋の猫	田中 勇
得しものは難のみならず春の風邪	田中 勇
はつきりと名を呼ぶ寝言春炬燵	田中やすあき
三時には起床している日永かな	田中やすあき
見晴らしの二階建てバス鳥帰る	田中やすあき

しゆわしゆわと窓打つ音色春嵐	谷本 宴
花菜漬ほんのひととき京気分	谷本 宴
大試験ニーチェカントも悩んでた	谷本 宴
剪定に苦情の言へぬ庭木かな	月城花風
顔合はすことなき女雛男雛かな	月城花風
足音に止むも再び囀りぬ	月城花風
冴返るタイト急いで探さねば	土屋泰山
緊張の卒業式に屁の一番	土屋泰山
滑降の構えをみせて寒鴉	土屋泰山
寒もどるなんとかしてと新芽たち	坪田節子
霜の庭紅梅凜と立ちいたる	坪田節子
雛壇のひなに恋して光る君	坪田節子
薬や不老の薬飲めど死ぬ	長井多可志
春泥を踏む河馬の子も人の子も	長井多可志
春浅し我家の掃除ルンバ待ち	長井知則
水温み風呂の清掃妻に継ぐ	長井知則
大谷ロスの年休は春みぞれ	長井知則
咲く時の夢も手中に苗木市	西野周次
伊予讃岐阿波土佐凌駕春疾風	西野周次
赤白黄信号になれずチューリップ	花岡直樹
矢絰とブーツが似合う卒業子	花岡直樹
啓蟄の先導役なりビアの泡	花岡直樹
引力に従ひ椿落ちにけり	浜田イツミ
保管せしじやが芋の芽の総立ちに	浜田イツミ
牛虻や頭なでるはセクハラか	浜田イツミ
ペットボトルどんぶらっこ川温む	久松久子
観光客に愛想笑ひの小倉山	久松久子
山茶花の散りて道路を独り占め	久松久子
耕しや眠さうな土起こしゆく	日根野聖子
小坊主の頭のそりたてやつくしんぼ	日根野聖子
卵サンドの色そつくりの花ミモザ	日根野聖子

春闘や社員奥方ストライキ	細川岩男
己知り頭脳に合わせ受験する	細川岩男
春一番埃に塗れ子らの声	細川岩男
背伸びして木の芽嗅ぐ猫ぴんと髯	ほりもとちか
一夜草心の中に棲む長子	ほりもとちか
筍を湯搔くや孫をおんぶして	ほりもとちか
植木鉢割りて鎮まる春一番	南とんぼ
佐保姫頑張れ敵の足腰萎えている	南とんぼ
白酒や夜の囃子は舌鼓	峰崎成規
今宵こそ向き合ひさうな内裏雛	峰崎成規
卒業式知るには遅し皆勤賞	峰崎成規
入学式親のスカート離さぬ子	明神正道
桜薬明かり障子を過る影	明神正道
逃げ水や俳句に八苦「がはてもに」	明神正道
レジ袋代はりに使ひ海苔袋	椋本望生
羽搏けば真つ赤な嘘も鷲らしく	椋本望生
生首が湯船に浮かんでいる瀬祭	椋本望生
楽しみは腹一杯の雑煮餅	村松道夫
元旦の何を言はんか能登地震	村松道夫
流氷に乗って行きたや国後へ	村松道夫
ロケットをまねてとびだしつくしんぼ	森岡香代子
春眠やおまえはいつまでねるつもり	森岡香代子
耕しや今年は何を植えようか	森岡香代子
啓蟄の朝の蒲団に穴ひとつ	八木 健
鼻の穴春めく庭の土を嗅ぐ	八木 健
青春の木々の芽吹はニキビとも	八木 健
白魚に溜まり醤油を躊躇なく	八塚一青
子を立たせ撮る桜もう六年目	八塚一青
記憶にはございませんに朧の夜	柳 紅生
メーデーの親父スナックでは社長	柳 紅生
新社員二番煎じもありがたく	柳 紅生

蠟梅の香を送れとのメールかな	柳村光寛
初蝶の祈りのかたち翅たたむ	柳村光寛
春眠や枕はいずこ広辞苑	柳村光寛
草餅は漉し餡あんぱんは粒餡	山内 更
ブギウギのボリューム上げて黄水仙	山内 更
春分や推しのライブへ夜行バス	山内 更
伊予柑の香に染め上がり指の先	山下正純
ゆつくりと足並そろへ春衣に	山下正純
九年母(くねんぼ)のあまた子宝抱きけり	山下正純
勿体ないほどに過ぎていく一月	山本 賜
蟻一匹落ちたとこありみな落ちる	山本 賜
干して気がついたTシャツのしみ	山本 賜
春近し医院に流るる早春賦	横山洋子
忘れたき事多かりき春灯	横山洋子
啓蟄や地中は平和か問うてみる	横山洋子
幾何学の枝に白梅一二輪	吉川正紀子
筋骨隆々無花果の裸木の	吉川正紀子
横着の手が届かない露の臺	吉川正紀子
リモコン受けに菓見つかり菜種梅雨	渡部美香
本日は包丁不要目刺焼く	渡部美香
月朧お前大事と言うてみい	渡部美香
バレンタイン夫から妻へチョコ一つ	和田のり子
日の方へ蕪の茎立ぐいと生く	和田のり子